みんなの学校2010　第２回

被爆者の心の傷と、人間回復への道

2010年３月４日

岡山県労働者学習協会　長久啓太

本日の話の前に

被爆者の**証言の「言葉」の重さ**について（資料：証言集もみながら）

◇被爆者の多くは「**忘れられるものなら忘れたい**」と思っている
＊頭からこびりついて離れない「あの日」の惨状と自分の体験

◇証言は、「あの日」の惨状、自分の体験・感情を思い出しながら…
＊思い出すだけで、**相当な精神的・肉体的苦痛をともなう**

◇では、なぜ、あえて「証言」をするのか・・・
＊**核兵器廃絶・平和への希求**。「伝え残したい」という強い気持ち。

本日のポイント

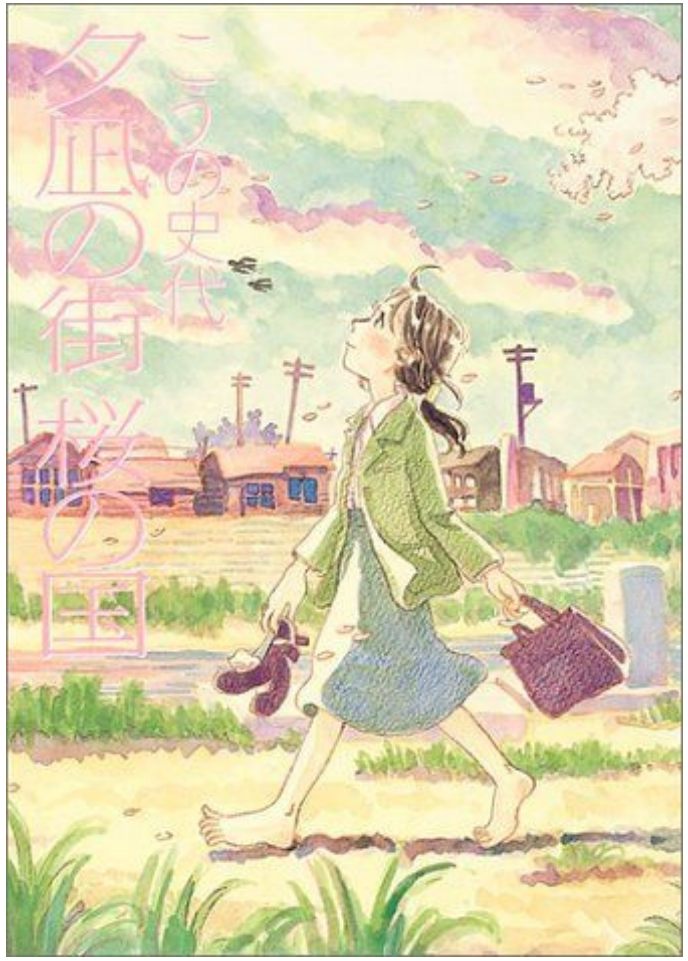
①生き残ったことを喜べない。消えない「心の傷」。

②人間をとりもどすたたかい－被爆者の苦悩と生き方

①『夕凪の街、桜の国』より

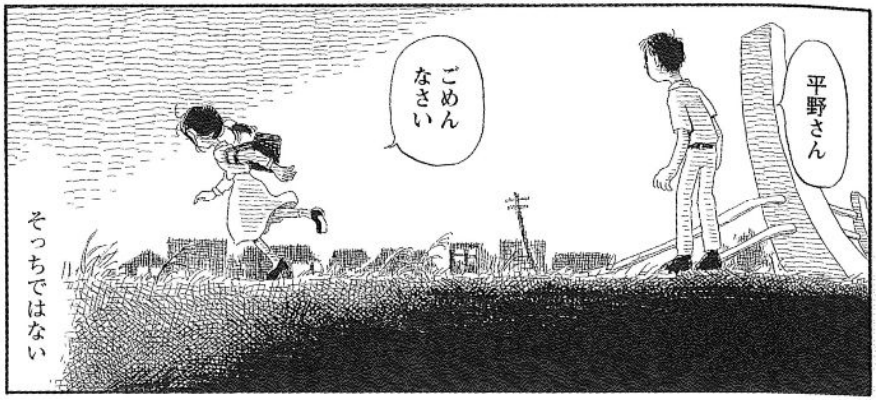
（こうの史代、双葉社）

原作コミック



映画にもなりました。

そっちではない
お前の住む世界は　そっちではないと
誰かが言っている
８月６日　水を下さい　助けてください
何人見殺しにしたかわからない
堀の下の級友に今助けを
呼んでくると言ってそれきり戻れなかった

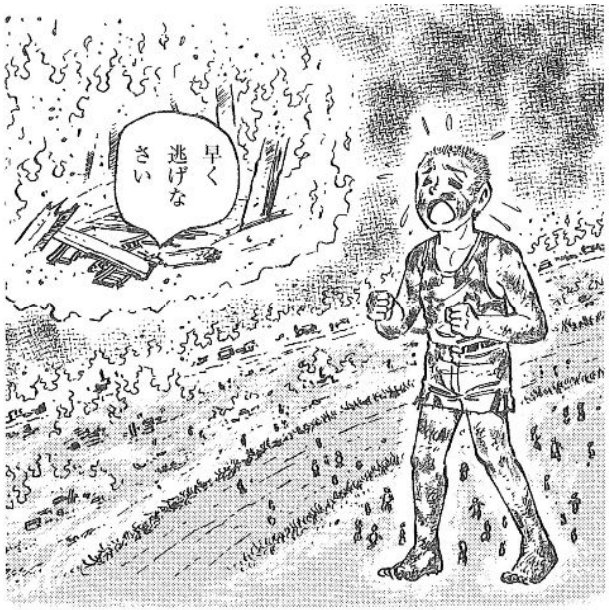


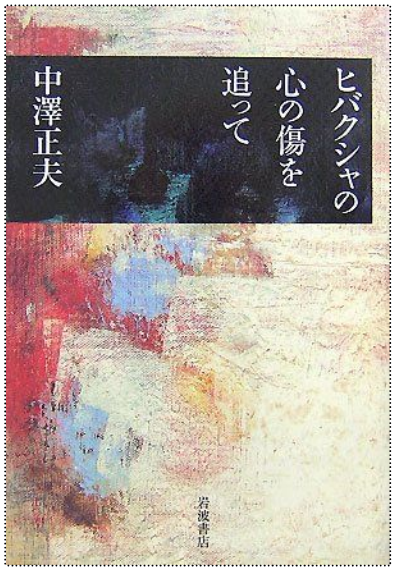
救護所には別の生物のように　まん丸く膨れた集団が黙って座っていた
そのひとりが母だった
（略）
死体を平気でまたいで歩くようになっていた
時々踏んづけて灼けた皮膚がむけて滑った
地面が熱かった　靴底が溶けてへばりついた
わたしは　腐ってないおばさんを冷静に選んで
下駄を盗んで履く人間になっていた
（略）
あれから十年
しあわせだと思うたび　美しいと思うたび
愛しかった都市のすべてを思い出し
すべて失った日に引きずり戻される
お前の住む世界は　ここではないと
誰かの声がする　　（P23～25）

②被爆者の「心の傷」を具体的にみる

◇心のありようは、きわめて個別性が高く、100人100様…。被爆者の個別性を越えた、「心の被害」の共通性を考える。

◇その「心の被害」が、被爆者の生活や生き方にどんな影響を与えているのか。





『ヒバクシャの心の傷を追って』

中澤正夫、岩波書店

（１）記憶の欠損ー見ているのに、見ていない

資料

被爆者の証言集から

猛烈な勢いで炎上していた浦上地区。
――大脇繁雄

「見ても見えないという現象は、いきなり襲った『恐怖・驚愕』、想像することさえできなかった事態の出現（一瞬にして消えたまち、大量の異形の死体）に対する自我防衛反応と考えられる。それは本能にのみしたがった逃避行動であり、視角入力の拒否である。これらを通常のごとく入力していたのでは、身がもたないからである」
（『ヒバクシャの心の傷を追って』）

（２）罪意識、自責感、自己否定、後悔…

資料

被爆者の証言集から

「被爆から日がたってくると『あの日』に無意識に、本能的にとってしまった自分の行動がしだいに思い出されてくる。その行動は人間としてどうであったかを自問するものとなる」（前掲書）

「自責感をともなう鮮明な記憶は、いくら経っても封印されることはなく、逆に強化される。それは相対化されることを拒むきわめて『個人的なもの』となり、その結果、さらに被爆者を苦しめ続けるという悪循環におちいっていく」（前掲書）

（３）感情麻痺、人間性の喪失－自己査定

資料

被爆者の証言集から

遺体を焚口で集め、山のようにして
あちこちで焼いていた。
誰が誰だか分かりようもない。

――坪中愛子

「軽傷で余力のある人が大量の死体を見、運び、名前も確認せず焼き、うめる。非日常的な光景である。日常的な弔いにつきものの、情感の高まりをもっていては作業できない。死者に個人を感じない、人間を感じない、『麻痺状態』でなくてはできない。その意味で、感情麻痺も本能的に作動した自我防衛機制といえる。喜怒哀楽を感じるメカニズムにバリアを張ってしまったのである。それでもあとになって『モノのように扱ったこと』『何にも感じなかったこと』は、人間として許されないと、被爆者の心に深い傷として刻印されていくのである」（前掲書）

（４）いまなお続く、引き戻らされ体験

資料

被爆者の証言集から

◇ちょっとしたキッカケで、「あの日」の状況が、恐怖と自律神経症状をともなって脳裏に再現してしまう。フラッシュバック。

◇場所、音、光、臭い。

◇「体験を語る」ことは、強烈な「引き戻らされ」のキッカケとなる。

（５）あきらめきれない（行方不明による死体未確認）

資料

被爆者の証言集から

戻ってくるのではないか…

（６）死別の悲しみ（悲嘆）

資料

被爆者の証言集から

死は残された者にとって、その死をとり込んだ新しい生のはじまりのときでもある。

「『時が経てば、苦しみはうすれる』と多くの人は思うようである。たしかに、時の流れによって変化する部分はあるのだろうが、悲しみそのものは消えることなく、死別の直後とはちがう悲しみや思いが加わっていく。

時の流れは、遺族にとってやさしく、また残酷なものでもある。死の直後のような激情が、突如おそってくるようなことはなくなるものの、故人とともに過ごす計画をたてていた日が近づいたり、誕生日を迎える時など、悲しみにひきもどされるきっかけは、日常生活のあらゆるところにひそんでいる」

（『死別の悲しみを超えて』
若林一美、岩波現代文庫）

（７）原爆症の恐怖

資料

被爆者の証言集から

「肉親、知人が被爆後障害になる、あるいは死ぬというできごとは、『あの日に引き戻される』一番強烈なきっかけとなる。次はわが身と考えるからである。…（略）健康を損なうことは『あの日』に連れ戻される、強いキッカケなのである。だがそれを、被爆者は口にしない」（『ヒバクシャの心の傷を追って』）

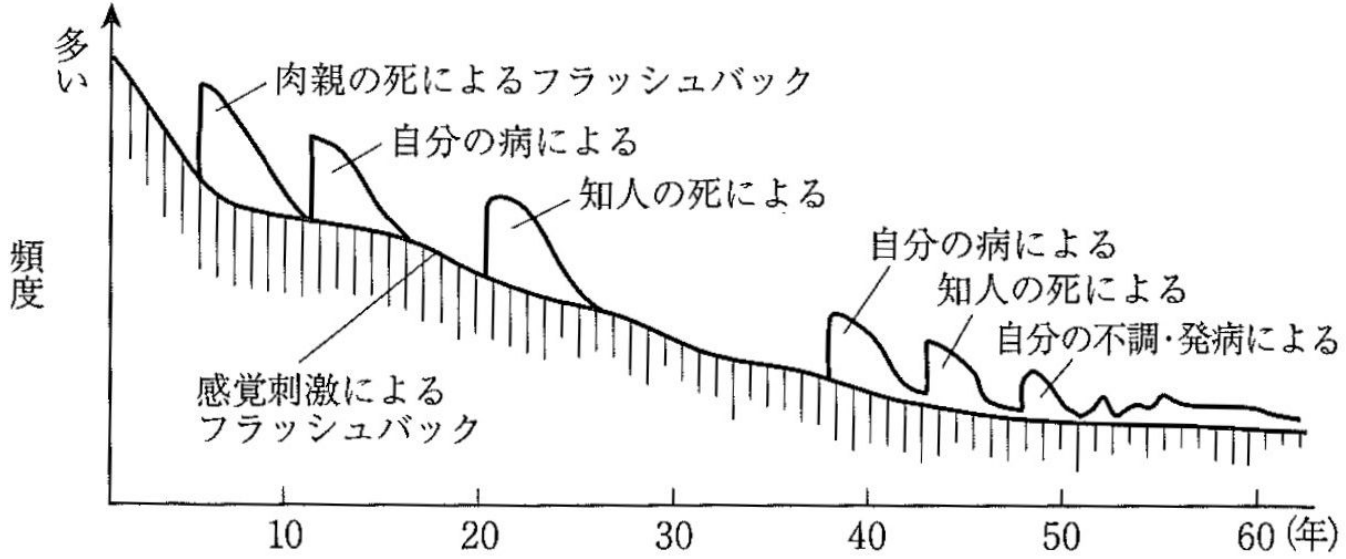


図 13　ひとりの被爆者にみるフラッシュバックの頻度
年々，感覚刺激によるフラッシュバックは減っていくが，肉親の死や自分の病など，さまざまなキッカケの生じるたびに頻度が突出する

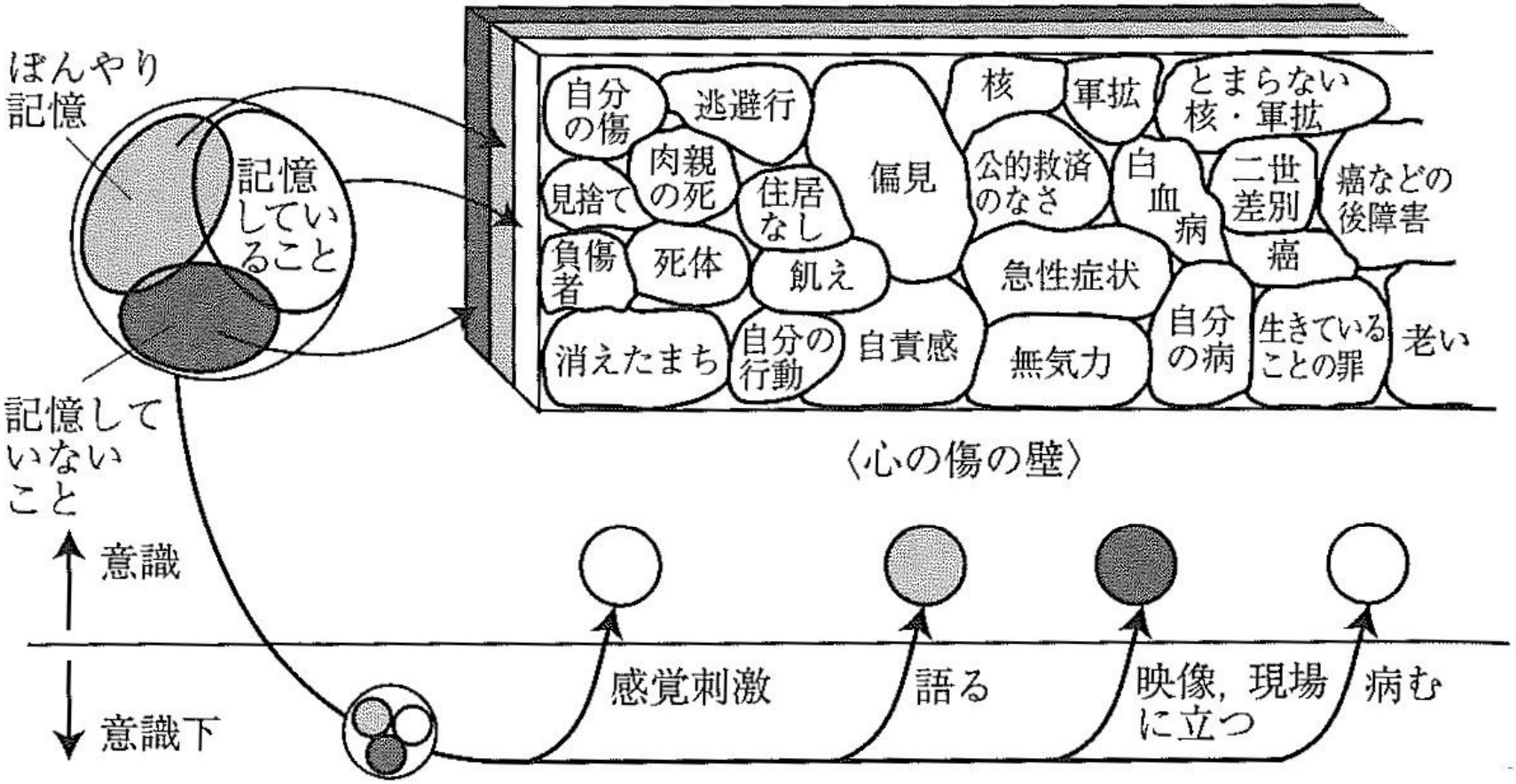


図 17　心の傷のイメージ

〈心の傷の壁〉は，記憶していること以外にぼんやり記憶や記憶していないものの 3 層構造になっている．ふだんは意識下にあるが，感覚刺激や病むことにより記憶していることが，語ることでぼんやり記憶が，意識にのぼってくる．映像や現場に立つことで，記憶していないものまでが意識にのぼってくる

『ヒバクシャの心の傷を追って』より

（８）サイレント・マジョリティ

◇広島にて被爆した元軍医、肥田舜太郎氏によると、いつでも求められれば自分の被爆体験を語れる人は、数千人のレベルであろうという。これは、被爆者の5%ほど。

◇いまも自分が「被爆者である」ことを語れないは、40～50%といわれている。

◇原爆と自分を対峙させることにより、反原爆の思想を育てていく人も多い。それらの人が被爆者運動を引っ張り、核兵器廃絶のたたかいに立ち向かっている。しかし、そこまで踏み切ることがどんなに困難なことかを、私たちは忘れてはならない。

いまも原爆のことを語れない人たちの中にこそ、「心の被害」の本質がある

③人間をとりもどす－被爆者の苦悩と生き方

あらためて、原爆とは何か。

1人ひとりの人間の視点で問い直す。

私たちは、被爆者の証言や苦難の人生、
そしてその生き方をとおして、原爆の本質にふれる。

「被爆者を理解しようと思うならば、常に人間を否定する力としてのみ働く原爆と、それに抗って生きていこうとする人間と、その二つの力のつばぜり合いとして被爆者をとらえなければなりません」（石田忠『原爆被害者援護法』）

原爆体験

引き戻される

差別や偏見

無気力

自責感・罪の意識

常に人間を押し
つぶそうとする力

なくならない核

病気への不安

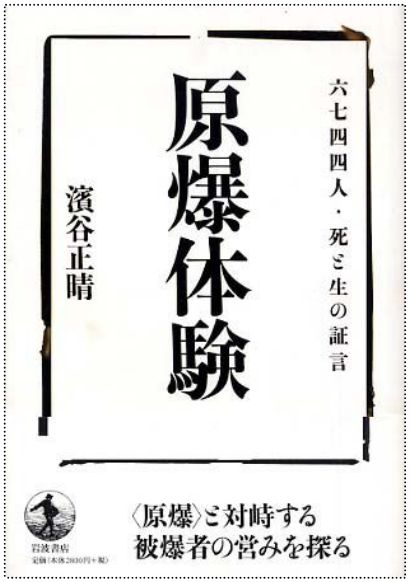
身近な人の死

公的救済のなさ

人間らしい生

生きる意欲の喪失

被爆者の生きる支えはなんだったか。



『原爆体験－6744人・死と生の証言』

濱谷正晴、岩波書店

「家族に囲まれて暮らすこと」（39．8%）

「核兵器をこの地球からなくすために生きること」（35．1%）

「安定した生活を築くこと」（34．6%）

「援護法制定の日まで生き抜くこと」（33．3%）

「多くの人とふれあうこと」（27．4%）

「趣味に生きること」（26．9%）

「原爆で死んだ人たちの霊をなぐさめること」（24．2%）

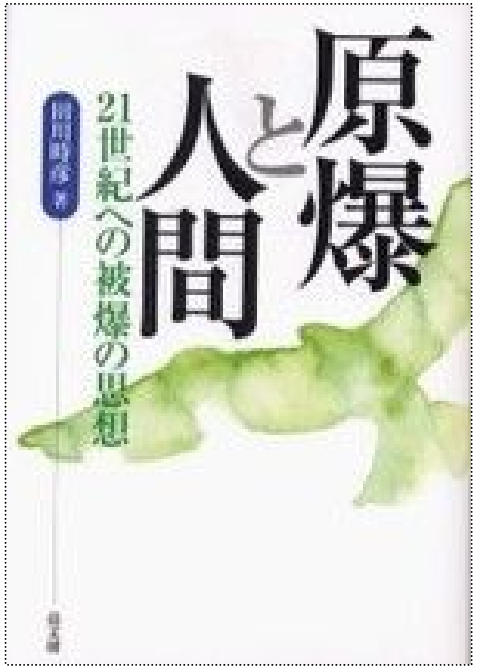
「被爆の証人として語り継ぐこと」（24．0%）

「地域や社会のために役立つこと」（22．3%）

「被爆者の仲間のために役立つこと」（（21．6%）

「原爆に負けないようにすること」（16．5%）

■原爆とたたかうこと　■人とのつながりのなかで生きる



『原爆と人間－21世紀への被爆の思想』

田川時彦、高文研

「被爆者にとって、生きるということは、体のなか、心のなかの原爆とたたかうことを意味した。原爆を消し去ることも、原爆から逃げることもできないとすれば、それに立ち向かい、それとたたかうことでしか生きようがないのである。それは、原爆によって壊された、自分たちの人間性をとりもどすたたかいでもあった」

被爆者　渡辺千恵子さんの生涯から

１９２８年に長崎市で生まれる。１６歳で被爆。下半身が動かなくなり、被曝直後は生死の境をさまようが、母の必死の看病で命を救われる。しかし、体が動かず、家の外に出ることもできない。何度も死ぬことを考えたが、母の愛情には勝てなかった。

彼女の人生を変えたのは、原水爆禁止世界大会であった。「長崎原爆乙女の会」に参加し、第２回の長崎大会（1956年）では、母に抱きかかえられ、参加者に被爆体験を訴えた。彼女の訴えは、３０００人の参加者の心をゆり動かす。

以後、必死のリハビリで車椅子で移動できるようになり、長崎の被爆体験の語り部として、全国津々浦々へ、「平和の旅」に出かけるようになる。

1985年、彼女の証言に感動した園田鉄美ら長崎センター合唱団の若者たちが、合唱組曲「平和の旅」をつくり、彼女が動けなくなった晩年には、合唱団が「平和の旅」へ出た。1993年に亡くなるまでの、渡辺さんの苦悩とたたかい。どんな思いで証言活動を続けたのか。彼女の思いを、ぜひ聴いてほしい。

合唱組曲の4曲目から聴いてもらいます。語りは日色ともゑさん。

ナガサキから

園田鉄美

八月のナガサキを　知っていますか
焼きつくされ　殺された　あのナガサキを
あれから　幾年　月日は移り
緑は繁り　街並みも　よみがえったけれど
　私の体に　刻まれたこの傷は
　癒えることはない
　だからもう　二度と　繰り返さないで
　　ああ　ナガサキを
　それが今の私に　残されたすべてだから
　私の体に　刻まれたこの傷は
　癒えることはない
　だからもう　二度と　繰り返さないで
　　ああ　ナガサキを
　それが今の私に　残されたすべてだから

娘　よ

園田鉄美

1. 娘よ　私の体を裂いて　生まれ出た　娘よ
　おまえは　あの日から　立つこともできず
　娘盛りの日々を　笑う事もなく
　過ごしてきたけれど
　そんなおまえの　言葉を
　待ちわびている人たちがいる
　　語りなさい　ためらいをすてて
　　語りなさい　苦しみの日々を
　　語りなさい　おまえの胸のすべてを

2. 娘よ　私の命を分けて　生まれ出た　娘よ
　おまえは　長い間　語る友もなく
　つらい日々を過ごし　生きる望みも
　なくしていたけれど
　そんなおまえの　言葉を
　待ちわびている人たちがいる
　　語りなさい　ためらいをすてて
　　語りなさい　苦しみの日々を
　　語りなさい　心開いて

語ってください友よ

園田鉄美

語って下さい友よ　命を削って生きてきた
あなたの胸の痛みを　語って下さい友よ
聞かせて下さい友よ
苦しみ背負って生きてきた
あなたの胸の怒りを　聞かせて下さい友よ
　八月のナガサキの　狂おしい真実を
　私たちの心に深く　刻んで下さい友よ
　八月のナガサキの　狂おしい真実を
　私たちの心に深く　刻んで下さい友よ

平和の旅へ

松下　進

平和の旅へでかけよう
あの日のナガサキの語り部として
平和の旅へでかけよう
それが私の　生きてゆく　あかし
胸はずむ　友との出会い求めて
車椅子で漕ぎ入れる　見知らぬ町へ
草の根の　ひとつひとつの命に触れて
平和の旅へでかけよう
　平和の旅へ　平和の旅へ　それが私の人生
　平和の旅へ　平和の旅へ　それが私の人生

平和の鐘を鳴らそう

園田鉄美

※
未来をきずく　若者たちよ
いのちを育くむ　母親たちよ
歴史を語る　老人たちよ
時代を拓く　働く人々よ
笑顔にあふれる　子どもたちのために
心をひとつに
草の根の　平和の力のすべてを
束ねよ　ひとつに
平和の鐘を打ち鳴らそう
今こそ　高らかに
平和の鐘を打ち鳴らそう
世界の心に響くよう

※繰り返し

平和の鐘を打ち鳴らそう　さあ今　高らかに
平和の鐘を打ち鳴らそう　世界の心に　響くよう
(世界に　平和を　くずれぬ　平和)
平和の鐘を打ち鳴らそう　さあ今　高らかに
平和の鐘を打ち鳴らそう　世界の心に　響くよう
(ノーモア　ヒロシマ　ノーモア　ナガサキ)
アー…

「“にんげんをかえせ”の被爆者の生き方を、大きな使命感をもった人間共通の生き方へと転化させなければならない」

（田川時彦『原爆と人間』）

次回（3／18）テーマ　「原水爆禁止運動と被爆者のたたかい」